氏名	Andina Misana
学位の種類	博士（地域研究）
学位記番号	国博甲第 7 号
学位授与の日付	令和 2 年 3 月 20 日
論文題目	Nuclear Issues in Japanese Literature after Higashi Nihon Daishinsai: Reading Tawada Yoko's Short Stories in *Kentoushi*
審査委員	主査（教授）川島　正樹
	（教授）山下　聖美（日本大学）
	（教授）上村　直樹
	（教授）蔡　毅
	（教授）森山　幹弘

１．論文の内容の要旨

本論文は、2011 年 3 月に発生した東日本大震災とそれによって引き起こされた深刻な被害と様々な社会問題をテーマとして日本語で書かれた文学作品を網羅的に収集し、それらを分析素材としながら、日本において十分に注目されてきたとは言い難い放射能汚染に関わる問題をテーマとして作品を発表してきた３名の日本人作家を取り上げ、中でもドイツ在住の日本人作家として海外で高い評価を博している多和田葉子の文学活動に注目し、その代表的な作品を主要な分析素材として選び出し、国際的視野に立ってそれらの意義を追究することを目的として英文で執筆された論考である。

まず取り上げられるのは、震災後の重要なテーマである原発事故の社会的影響とその事故による被害者のトラウマに注目したがゆえに震災後の文学を代表すると従来見なされてきた二つの作品、すなわち川上弘美の『神様２０１１』と津島祐子の『山猫ドーム』であり、Andina 氏は従来の主要な評価の傾向を踏まえつつも、独自の解釈を試みている。続いて Andina 氏は、それらの作品において十分に顧みられなかった東日本大震災によって引き起こされた放射能汚染に関するテーマを、海外在住日本人作家として独特の角度から取り上げた多和田葉子の短編集『献灯使』に収められた「献灯使」「不死の島」「彼岸」という三つの作品の分析と解釈を試みている。その際に、東日本大震災とそれによって引き起こされた放射能汚染に注目し、日本国内におけるものだけではなく、海外において展開された言説にも注意を払い、特に震災発生後のインドネシアでの報道から関連記事を収集し、分析と解釈も試みている。その結果、多和田の文学作品の分析と解釈に、これまで日本における批評になかった新たな視点と厚みを持たせる工夫が試みられている。また多和田の作品の分析と解釈においては、文学作品の作り手と批評家の双方における新たな理論的枠組みとして近年注目を集める「文学のパフォーマティブ性」の観点を導入し、新視角からの作品分析を試みるとともに、その解釈に説得力を高めることにも努めている。

本論文では、震災後の日本の文学作品を扱った新しい研究の進展とともに近年「トラウマの文学」と呼びうる一つの新ジャンルが確立される傾向が見られることが指摘され、その関連作品群が一般的に社会的に重要な意味を帯びていることに特に注目が及んでいる。本論文では、とりわけ多和田葉子の作品に見られる強い批判的精神、普遍的価値の追求、さらには社会および国家的制約から独立した立場に基づく鋭敏な象徴的表現手法といった諸特徴に注目することを通じて、多和田が社会に対して担うべき小説家としての義務を自覚的に果たしていると結論付けている。

次に本論文の章構成と各章の内容について概説する。本論文は序章および結論を含めて五つの章から成っている。序章では論文の背景としての東日本大震災について概要の説明に続いて震災後の文学に関する先行研究のまとめと分析がなされ、文学の「パフォーマティブ性」に着目する新たな理論的な説明と研究の枠組みの可能性についても論じられている。加えて、本論文が分析素材とする資料と題材についても述べられている。

第１章では日本において東日本大震災がどのように報道されてきたか、またその後の福

島第一原子力発電所における事故と放射能汚染の深刻化、また被災者の避難とそれに伴う問題について、国内と海外のメディアの反応について述べられる。とりわけ同じく歴史的に地震や津波にたびたび悩まされてきたインドネシアにおける主要な日刊紙である『コンパス』と雑誌『テンポ』が数ヶ月間の長きにわたってこの事件をどのように報道してきたかについて、多数の関連記事を素材に丁寧に分析される。インドネシアの報道における従来否定し難い「日本贔屓」の傾向を背景としたやや偏った報道や感情論に訴えかける論調という批判的事実が明らかにされるとともに、日本国内では明らかにされてこなかった日本政府の対応の拙さに対する厳しい批判が海外メディアでは行われていたことも指摘されている。収集され分析の対象とされたすべての資料については14ページにも及ぶ詳細なリストとともに補遺として末尾に付されている。

第２章では震災後に書かれた小説を中心とした文学作品について網羅的な調査に基づく分析結果が示される。一般的な印象においては津波などの被災に比べ、放射能汚染がもたらした社会への影響については日本ではこれまであまり注目されてこなかったように見なされる傾向が否定できないが、一覧表にされて可視化されているごとく、実は震災直後から文学者の関心はこのテーマに向けられてきたのである。Andina 氏の調査によれば、震災後に発表されたこの問題に関連する 76 作品をテーマ毎に整理すると、①原子力発電所と放射能汚染、②震災後の生活と喪失と希望と混乱、③戦争と災害の記憶、④生と死および死者、⑤絆、⑥震災後の将来と復興が遅れる故郷、⑦宗教と信仰と哲学という、七つのカテゴリーに分類できる。本論文では、中でも特に話題作となった川上弘美の作品『神様２０１１』(2011 年 9 月出版）と津島祐子の作品『山猫ドーム』(2013 年 5 月出版）が取り上げられ、前者では原子力発電所の事故と放射能汚染、後者では震災後の未来の日本社会を軸に、分析と解釈がなされている。

第３章では本論文が主として扱う多和田葉子の特異な立場とそれと関連する独特の震災関連の作品について分析と解釈がなされている。まず第１節では多和田の文学者としての歩み、特にドイツ在住である多和田の地球市民的な作家としての姿勢、ドイツ語と日本語で書き分ける複数言語を自在に扱って執筆される諸作品の特徴などに焦点が当てられ、多和田文学の特徴について論じられる。第２節では多和田自身が東日本大震災と福島の原子力発電所事故をどう見ていたか、日本政府の対応や日本のメディアの言説に対して国外に居住する多和田が率直な批判を展開していた事実が明らかにされる。

第４章ではその多和田の短編である「不死の島」を取り上げ、原子力発電所の事故がもたらす恐ろしい影響をテーマとして、どのように作品として描きうるかが論じられる。次に取り上げられる作品である「彼岸」の分析では、日本の原子力政策に対する批判や原発事故後の対応や住民避難誘導の拙さに関わる問題を軸にして、作品に現れる反原発の思想が読み解かれていく。最後に、短編集の表題作でもある「献灯使」を丁寧に読み込み、放射能汚染の恐ろしさ、原発事故によってもたらされた地獄のごときありさま、さらには放射能被害に関わる政府や社会による言論の自由の抑圧、住民の絶望と無力を、その物語世界の中に身を

置きつつ分析と解釈が試みられる。この過程で、日本在住の作家たちが様々な制約や言論の抑圧から十分に書き切れなかった特定テーマを、国外に在住しているが故に見えてくる観点や独立した批判的立場からはっきりとした筆致で問題を描き出していく多和田文学の異色さと秀逸さ、卓越した文学者の使命感が浮き彫りにされ、Andina 氏によって説得をもって評価される。

結論においては東日本大震災後の日本文学の総体を題材とし、関連作家の内でもとりわけ多和田葉子の作品の分析と解釈の試みを通じて、彼女の作家としての姿勢と力量が高く評価され、文学は社会問題に対して重要な役割を持ち、作家には特別な使命があるという彼女の秘められた主張、および文学作品は社会と切り離して解釈できないという点が確認されるとともに、従来言われてきた「震災後文学」と呼ばれるものに回収しえない、世界の文学においても注目すべき新たに「トラウマの文学」と呼べる一つの文学ジャンルの確立が認められる一連の作品群が形成されつつある、という結語で締めくくられている。

２．論文審査の結果の要旨

本論文は東日本大震災が発生した 2011 年春から 2017 年までの日本語で書かれた東日本大震災と原発事故をテーマとした文学作品群を題材とし、丁寧な分析と解釈を行った文学研究の労作であると判断される。まず基礎的な作業として、網羅的な資料の収集と整理が丹念になされ、その結果が充実した補遺として本論文末尾に付されており、本分野における今後の研究の進展にとって価値が高い資料の提供という重要な貢献をしている点で高く評価されうる。特に本論文が英語で執筆されている点は、今後増えると予想される日本語を第二言語とする日本文学研究者にとって、将来的に計り知れないほど有益な研究材料を提供する点でとりわけ高く評価されうる。

論文の体裁については、註、参考文献表、引用の仕方にとどまらず、膨大な資料の整理においても適切に行われており、博士論文としての完成度は高い。その一方で、英語の表現や文法上の誤りが散見される点が惜しまれるものの、それらは修正によって十分挽回が可能である。内容的には、東日本大震災に関連する文学で従来タブー視される傾向にあった原発事故を主要テーマとする研究は我が国においてその関心自体が希薄であったと言わざるを得ず、あまり行われて来なかった事実が否めず、それと真っ向から取り組んだ本論文の学術的な貢献度は極めて高いと評価しうる。

何よりも丹念な分析と説得的な解釈に基づく Andina 氏の研究態度から明らかになるのは、事実の報道を職務とするジャーナリストとは異なった、フィクション性を前提とするがゆえに、文学者でしか果たし得ない独自の使命に関する次のような主張である。すなわち、文学作品でしか表現できない人間の心、感情、そして人間性というものがあるという主張であり、多和田葉子という海外に居住し続けることで独立した批判の姿勢を貫いている作家の作品を読み解くことで、文学の普遍的価値観にまで踏み込んで論じている点はなによりも大いに評価しうる。加えて、東日本大震災発生後に出版された文学作品群は従来「震災文

学」と呼ばれてきたが、とりわけ原発事故とその後遺症をテーマとして捉える作品群に注目することで、新たに「トラウマの文学」という独立したジャンルの確立を認めるべきであるとする提案をしている点にでも、大いに独創性が認められる。理論的にも文学の「パフォーマティブ性」の観点を取り入れることでその主張の説得力は増している。以上を踏まえれば、文学研究としての要件を十分に満たしていると評価しうる。

最後に近年は「外国文学」としても取り組まれつつある日本文学研究の今後の更なる促進における本論文の貢献について付言する。本論文執筆者にとって外国語である日本語で書かれた多くの文学作品を丁寧に読み解くこと、さらにそれを外国語である英語で論文としてまとめることは多大な困難と労力を有したものと推察されるが、Andina 氏は十分に当初の課題を達成していると評価できる。確かに英語の記述と表現方法に関してまだ研鑽の余地があることが否めないものの、それらは十分に解読可能で修正も容易な範囲に留まっている。加えて、将来的に第一言語であるインドネシア語で書かれた草稿を推敲しインドネシア語での書籍として出版することができれば、インドネシアにおける日本研究に将来的に大きな貢献を果たすことが期待できる。さらに、本論文の執筆の過程で Andina 氏によってインドネシア語に翻訳された多和田葉子の短編集『献灯使』がインドネシアで出版されることも大いに望まれる。

令和 2 年 2 月 19 日

審査委員　主査（教授）川島　正樹
（教授）山下　聖美（日本大学）
（教授）上村　直樹
（教授）蔡　毅
（教授）森山　幹弘